



からすライターおてがら!

二〇〇二年某月某日

都内某団地内にて複数の目撃証言から覗き魔が出没するとの情報を得る。話によると団地内の私道を音も無く徘徊し、道路に面した

風呂場の窓から中を覗いているらしい。また、被害者に目撃されているにも関わらず、大胆にも明るいうちから団地内を闊歩し、あたかも散歩の風情を装っているとい

(二面に続く)



悪らつな痴漢を取り押さえた瞬間(再現写真です)

第5巻第9号
通巻第57号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/>

投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

今年の夏は、何だかよくわからないうちに終わってしまった。そう感じているのは私だけではない。人間だけでなく、他の生き物たちだって同じ思いなのではないだろうか。随分早くから 蝉が鳴いたなと思えば、秋も深まり始めたところになってみんみん蝉の音が景気よく響いたり。今頃になってぼつんと咲いている紫陽花もある、紅葉し始めている木々もあるのに。

盛夏らしい盛夏がやって来ないので、どうなっているのだろうと戸惑っているうちに秋は来にけり。そういったところではないか。

ああでもないこうでもないと思にもつかぬ着想を自室で 玩んでいた、とある午後ルリタテハよおと母の呼び声。途端 デジタル・ビデオ・カメラをつかんで階段を駆け降り、下駄をつっかけ飛び出す私。我が団地内で見かけるのは、ざっと二十年振りぐらいのことになるだろうか。そこには確かにルリタテハがいた。

早速、カメラを構え、ファインダーを覗く。技術の進歩は途轍もないもので、離れたところにいる蝶を、かなりの大ききで、それこそ手に取るように眺めることができる。いや、眺

めるだけでなく、その様がどどんと動画で撮影されていく。何と恐ろしい世の中であることか。

レンズの向こうには、黒に近い紺の地に鮮やかな白みがあった薄水色のライン。ゆつたりと羽を広げたり、閉じたり。一休みすると気が変わったのか、飛び立って旋回してはまた休む。羽を休める姿、舞う有り様。精悍、清涼。羽化したばかりなのだろう。疵一つ見当たらない。

称赞を惜しまない。この半年、いや、一年間に見たものの中で最も美しいものの一つ。そんな幸せを味わいながら、息を凝らして見つめていると、ふとファインダーの存在に違和感を覚えた。レンズ越しに見えているこの光景は実在のものなのか、と。心配になって、肉眼でルリタテハの姿を確かめる。目に映る大きさは異なれど、同じように美しく、同じように堂々と羽を動かし、冒険に立出する間際の些か昂揚した勇者の如くに、それはそこに同じように在った。

肉眼で眺めて、果たして、私は安心できたのか否か。飯にできたとして……。

(最終面に続く)

今日の紙面から

二・三(面) スクープ!
からすライターが痴漢を!

四(面) からすライブラリー

ライプ・パティ・スミス

本 点と線

ドラマ シールド

五(面) オープン

松本と話をしんボンパン

六(面) エスパーニヤ面

スペインは、カトリックの国である。



からす新聞は××××

が母体となって、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。

誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。

ヤンヒポの鬼平犯科帳

う。その風体は中年でやせ形、目撃情報は全てグリーン・マンのボロカケグリーンのセーターにベージュのチノパン、喫煙しながらだったり、ゴルフのスイングのまね事をしていたり想像力に乏しい行動が特徴のようだ。故についた名称が「ずばり」グリーン・マン」。

二〇〇二年某月某日

余りにも目撃情報が多数寄せられるのでついに検挙すべく行動を開始する。こちらは警備のプロであり日本国内での捜査という事もあり万全を期す必要がある。まず論理武装としては、団地住人からの依頼である事。装備としては被疑者の精神状態について皆目見当がつかない為、護身にも注意を払う必要がある。ただ、国内法により武器の所持が許されないの

二〇〇二年某月某日

準備から程なくして団地内での目撃情報を得る。即座に現場へ出動。団地内を巡回開始。約二時間程巡回するが、それらしい被疑者には遭遇しない。この日の警備は終了とする。

二〇〇二年某月某日

再度、目撃情報を得る。この時期かな

り冷え込んできた。前回同様巡回するが被疑者には遭遇せず。目撃情報は多数あるとの事だったが、この日を境に目撃情報が無くなった。

二〇〇三年某月某日

故あって、当該団地に移住する事になる。まだ今年「グリーン・マン」の目撃情報は寄せられていない。こちらに関して最大の弱点は本人を目撃していませんので、すれ違っても特定出来ない事にある。

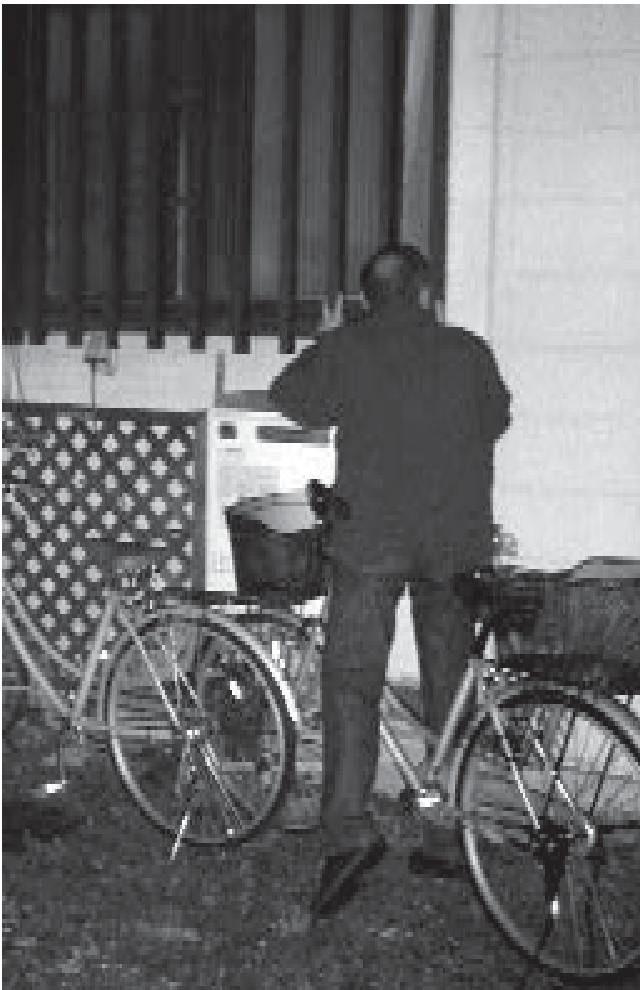
二〇〇三年一〇月六日午前一時頃

全く目撃情報が無いまま時が過ぎていく。この日は知人が当該団地内の自宅に寄り所用を足すとの事。本人到着後、荷物を運ぶ為団地内を横断する。当然警戒していないので、サンダル履き等の軽装のまま団地通路を移動していた。すると前方に人影があり通路から玄関方向へ向きを変えたのを目撃する。しかし当人は直ぐに



(上)パトロールに向かうヤンヒポ氏

(下)風呂場をのぞき込むグリーン・マン



向き直り、通路をこちらに向かい歩き出した。そのまま人とすれ違つた。そのまま進むと当人が向きを変えた場所には、玄関とその横には風呂場があり住人が使用中だった。そこで同行していた知人が「グリーン・マン」である可能性を示唆。最大の弱点である被疑者を目撃してない部分が露呈した格好になった。すかさず、目撃経験のある住人に連絡し、警戒の応援を要請。自分は直ちに自宅へ戻り、装備を整え警戒に当たる。

当該団地を一周したが、それらしい被疑者は見当たらない。応援要請した住人のポイントへ立ちより情報を交換する。その後再度巡回へ出る。一周目の巡回を開始した直後、やせ形で歩行喫煙しながら団地内通路を歩く不審者を発見。マグライトで顔を照らすと明らかに動揺しているのが伺える。すぐさま声をかけ事情を聴取、直感が「グリーン・マン」であると告げているので左腕を確保。目撃経験のある住人を呼び確認を依頼した所、間違いなく「グリーン・マン」である事が判明した。さらに、明るい所へ出てくると、緑色のセーターにベージュのチノパンを着用していたのだ。確保直後は多少抵抗を見せたが、体力的にみても明らかに劣る被疑者はほどなく観念したようだ。さらに、同じく警戒に当たっていた知人も合流し再度「グリーン・マン」であることを確認。直ちに警視庁への通報を実施。約十分後、最初のPCが到着。乗務員二名が聴取を開始した。その後同様のPCが二台と自転車乗務の警官が二名現着。知人を伴い目撃現場の写真等を撮影に出る。その間「グリーン・マン」は事情聴取を受けている。しかし、本人は覗きの事実を否定し続けているようだ。

後に判明した事だが、本人は以前団地に居住していた事実もあり年齢五十才、団地内部の事情には精通しているものと思われる。また多数の目撃証言がある事を考えると覗き魔である事は疑いの余地がないが、覗きという

立件の難しい事案ではよほどの現行犯で無い限り起訴が難しい事は重々承知している。しかし、これだけの騒ぎになり住居不法侵入の嫌疑がある為、被疑者は本署まで連行され指紋の採取や人定の確認が行われるとの事。確保から警察官の現着までの間に、被疑者に対し、次に団地内を徘徊しているのを目撃したら即通報と次は穏やかには済まさない旨を傳達している、よほど挑戦的で無い限り再犯の防止にはなつたと思われる。当然ながら同じ過ちを繰り返した場合は、実力で排除となる。しかし、幸運だったのは最初に遭遇して直ぐに検挙出来た事ではないだろうか。



(上)ついに御用となったグリーン・マン(再現)
(右)卑劣な痴漢行為の現場を確認(円内)



痴漢捕縛いたします

ストーカー バスター

produced by

P.D.Agency

tora@pda.co.jp

1843 N. Cherokee AVE: APT. #216

Los Angeles: CA 90028, USA

voice : +1-310-493-1001

facsimile : +1-323-466-5645

パティ・スミス・ライブ

7/9 2003
赤坂ブリッツ

Live

七月、パティ・スミスのライブに誘われたので、気狂いのコーちゃん(34)とその同居人でシャブ中のカマヤん(35)と一緒にいった。二人とも生活保護を受けながらいま更生に励んでいる。コーちゃんは元バリバリのパンクねえちゃん、彼女にとってパティはパンクのカリスマだ。もちろん、最前列で大満足。

一方、パティ・スミスとブルース・スプリングスティーンのどっちが好きかと問われれば、迷わず後者と答える私にとつてのパティ・スミスとは、彼の書いた『ピコーズ・ザ・ナイト』だ。それには思わず合唱したが、あとまあ、パティ・スミスも年取ったなあ、ぐらゐの感想なのであった。

パティ・スミスってパンクなの？
もちろんだあ。パンクは生き方なのだ。ノー・ウォー！なのだあ。

*えお、おえあ、ブアンキーとかすきあんでふけどえ。
*でも、俺はブアンキーとか好きなんですけどね。

(望月)



Patti Smith

「点と線」

松本清張

1960年 新潮文庫
4101-1091-84

(構想)を言語化できなくても、個々の設計(作為)を追及していくことによって、最後にその目的を明確にできることがある。最初から目的がはっきりしなくて進むとは、なんともしんどい作業だが、「点と線」の捜査陣のように、自分の想像力を頼りにしてまだ明確にできないデザインの間想を見いだしたいものだ。さて、この作品はどこにいても集中して読むことができるものだと思う。ぜひ、電車の中で一読してみてもどうだろうか。

(高橋)

The Shield Seasons 1 & 2



FX Network 制作

2002年エミー賞主演男優賞受賞

Films

60th ゴールデングローブ作品・主演男優賞受賞

主演：マイケル・チクリス 他

制作：ショーン・ライアン 他

ショーン・ライアンと言えば、日本でも放映していた「刑事・ナッシュ・ブリッジス」の脚本を手がけ、ウィットに飛んだセリフ回しがお手の物。そのライアンが現在本国でシーズン3の放映開始が迫っている「The Shield」の制作総指揮をしている。しかし、今回はかなりのハードボイルドタッチ。

主人公のヴィック・マッキー刑事(マイケル・チクリス)はL.A.の犯罪多発地区で「ストライク・チーム」という特殊捜査班のリーダー。決して大柄でなく、小太りに近い体形にスキンヘッドという今までの敏腕刑事像とは少し違う。違法行為も何のその。通り一遍の法律では片づかない現実の犯罪を自分の法律で町の秩序を保とうとする。当然、お堅い同僚とはぶつかり、政治色の濃い上司とは手に汗握る駆け引きを繰り返す。

以前にもダーティー・ハリーを始めとするアウトロー刑事モノは数多くあるが、このドラマは、昨今の米国主流であるハイテンポな展開と背景描写の緻密さ、脇を固める役者陣の演技力とキャラクター設定、聴視者を驚かさず意外性を全て兼ね備えている。さらに特質すべき点は、主人公自身の法律に合致すれば、殺人も決して躊躇わない冷酷さの中にある人間性だ。

(小張寅僧)



Books

この「点と線」は、推理小説として書かれた松本清張の処女長編である。以前からタイトルが渋いと思ひ、読んでみたいと思っていた。この作品は昭和32年から33年にかけて雑誌《旅》に連載されたものである。これに続いて「眼の壁」や「ゼロの焦点」等の推理小説、あるいは犯罪小説の短編集を精力的に書きついでいる。のちに社会派推理小説と呼ばれるようになった新しい文学エッセイの劈頭を飾るのが、この作品である。この物語は、犯人とその知人が、東京駅の13番ホームから、15番ホームの特急列車に乗ったある一組の男女を目撃することから始まる。その男女はのちに九州で心中する。この事件の裏にひそんだ恐るべき奸計。政治の汚職事件にからんだ複雑な背景と、列車時刻表を駆使した知能犯罪が読む人を引き込む。手に取ったなら、なかなか手放せない作品である。物語の最初から、なんとなく犯人らしき人物が誰か判るのだが、そのアリバイがなかなか崩れない。犯人の鉄壁のアリバイの前に立ちすくむ捜査陣が漏らした次の会話が印象的である。



松本と話す「パンポンパン」

変な夏でした。九月になって
実際、来たようなもんだから。
これはほとんど毎日、海を見て
自分が言うのだから間違いな
い。入道雲が現れたのも九月に
入ってやっとのことでした。
(神奈川県/南部)。

変な夏というと、米泥棒の多
さ。ほぼ毎日のように、主に東
北地方で報道されていた。し
かも大した量と額ではない。大
体が、「十万円相当の、」なん
てことだった。やっぱ、冷夏で
米が不作のせいなのだろう。と
結論付けようとしたが、農家つ
てウン十万円のためにそこまで
危ない橋渡るのかな?と疑問に
思った。しかも今年だけの影響
でしょ?国からも恐らく補助金
来るでしょ?じゃあ、消費者
か。それは考えられない。国家
に備蓄米があり、それで来年分

は賄えるということだからだ。
今年に至ってはなんら問題な
い。じゃ、誰だ?

結論。不特定多数の、農家も消
費者も含めたあの地方の人た
ち。DNA内に流れる、東北の
人たちの食料に対する危機意識
がそうさせたのだろう。近代に
なるまでは食料事情が非常に厳
しかったことで、長い年月かけ
て刷り込まれていたのだと思
う。たかが何十年かで簡単には
消えまい。自分のような九州人
的ケセラセラの発想はなかなか
生まれにくいだろうな。東北の
県は平均寿命が下位が多いが九
州はそのまるで逆。そりゃあ、
DNAの指令も変わってくる
さ。

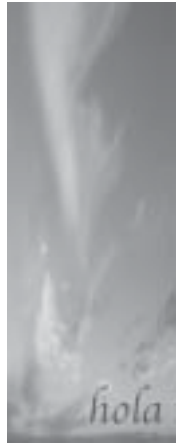
が、そのケセラセラ系の九州
人も含めて全国で、この夏に限
らずこの数年来、農業関係で異
変が起きている。都会からの地
方への農業就労人口の急増であ
る。しかもUターンでもなく、

これまで一切農業とは無縁で
あった人が無縁の土地に行く
という新しいパターンなのであ
る。特に都心部の脱サラの人た
ちが多いらしい。ちなみに、そ
んなに親しくはないが面識の
あった同じ職場のオヤジも、農
業をやる、といって長野に行っ
てしまった。予備校講師という
浮き草商売とはいえ、かなりの
人気で、ギャラもそこそこだっ
たにも関わらず、である。なん
でやねん?

結論。無意識のうちの神経症
の治療のためだろう。よく、田
舎の精神科の入院棟ではメ
ニューに土いじりを取り込むの
だそうだ。そういえば、ルース
ターズの大江君も nervous
s breakdownしたあと
実家の博多近郊の畑でやってた
な。今、彼、どうしてるんだろ。
それはそうととにかく、都会の
マネーゲームは来るとこれまで来
て破綻して、それに組み込まれ
ていた人たちは一部の勝ち組み

といわれているセレブな(あゝ
気持ち悪い、反吐が出そうな言
葉だ)人々を除いて、ギリギリ
のところをやってる。(貯蓄ゼ
口の世帯が急増/中高年男性の
自殺死亡率の高さ/電車内での
駅員に対する暴力行為の急増/
親のリストラが原因で辞める自
分の仕事先での生徒数の増加、
からそう判断した。)いつ弾け
てもいい状態だと思う。このテ
ンションは一種の神経症だと思
う。そして空気として都市部に
蔓延してると思う。

「元気です。野生化したニワト
リ。十メートルもジャンプ!」
まだ九州にいた十代の頃に
読んだ、おなじく九州人の村上
龍の「69」という小説の最後
の箇所だ。飼いならされて、も
うあとは肉として潰されんとす
るそのとき。結局、どう弾ける
か、ってことのようなうだ。



篠崎健一

スペインは、カトリックの国である。国民の90%以上がカトリック教徒である。各地に巡礼のための聖地があり、日常的な週末の小さな行楽でもそれらを訪れることがよくある。あるいは本当に、一生に一度くらいしかない「巡礼」の旅をするという。

バルセロナ近郊の、モン・セラは、奇岩でできた山中の、全く印象的な風景の中に修道院が建ち、マリア像と聖歌隊でよく知られている。マドリッドの近郊には、アビラという小さな街があり、ここは聖テレザの身体の一部が祀られているという。スペインで唯一の、城郭が完全な形で残った中世の街でもある。遙かスペインの北西の端、サンチアゴ・デ・コンポステラは、ポルトガルのすぐとなりにある。遠くフランスからピレネーを越え、北大西洋に沿って西へと向かう長い巡礼の道が続く。若者がバックパックを背負い、あるいは年老いた人びとがバスに乗って、この道を聖地サンチアゴ・デ・コンポステラへ向かうという。

サンチアゴ・ベルナベウ。これはマドリッドの市内にある聖地である。毎週日曜日、人びとはこの地に集まり祈りを捧げる。参拝者も皆、白か薄い紫色の装束に身を包み、その数は7万人にもなる。

サンチアゴ・ベルナベウの中はこんな具合だ。中央の芝生を囲み、がけのように切り立った階段状のひな壇が、コロッセオのように求心的な場をつくりだす。上部にひな壇を増やす工事がされており、7割方工事は終わっている。最近、巡礼者が著しく増加しているためだ。芝生は決して平らではなく、聖者たちももともと密集して激しくぶつかりあう、中央の祭壇の部分がわずかに盛り上がっていて、横に向かって下っている。緩い傾斜をもった奇麗に整えられた緑の面は美しい。

水はけをよくし、地面が荒れないようにしているのだろうか。修道院がビールを造って活動資金を得るように、アビラにも修道会の特別のお菓子があつた。大徳寺の大徳寺納豆のようなものである。モン・セラには、聖歌隊のCDや、修道会でつくった食品などが特別なものとしてギフトショップに並んでいた。街の商店も、聖地につくられたギフトショップも大勢の人びとで賑わっていた。これらのサイドビジネスも大切な財源だ。サンチアゴ・ベルナベウにもそのすぐ横にショップがあり、番号のついた白い装束やらなにやら、さまざまな商品を扱う。

レアル・マドリッド対バルセロナを本拠にするエスパニョール。相手

チームに浴びせられるブイイングは、すごい音量だけでなく悪意すら感じる響きである。ジダンのシュートがわずかに枠をはずれると、その一瞬をめぐって、地鳴りのような歓声が、急速に盛り上がり、すぐに引いてゆく。ラッパや太鼓のような鳴り物はなく、歓声も常に一定の音量で沸いているわけではない。皆、それぞれが勝手な方法で興奮し、口々に選手の名前を呼んだりする。また普段から沈黙は悪のお国柄である。何がしか関係のない話をしていくかもしれない。それとも試合の評論でもしてるのだろうか。スタジアム全体が雑踏に包まれているような、落ち着かない雰囲気である。相手の選手がボールを持ってても、雑踏の音量は変わらない。しかし相手の得点が認められる

(最終面に続く)



ヒー・ドント/シー・ドント

ちかごろ村上春樹による新訳が出た J.D. サリンジャーの “The Catcher in the Rye”。野崎孝訳による『ライ麦畑でつかまえて』で言わずと知れたあの「青春小説の金字塔」だが、その中にこんな一節がある。

he was very ashamed of his parents and all, because they said "he don't" and "she don't" and stuff like that

「彼は自分の両親をひどく恥ずかしいと思ってたりして、なぜかっていうと、“ヒー・ドント”とか“シー・ドント”とかそういうことを言っちゃうからなんだ」

添えたのは直訳だが、どうにも日本語に置き換えにくいのは、“he don't” and “she don't” のところ。「主語が3人称で単数、そして時制が現在なら、動詞にs などをつける」という有名な法則を知らない人はいないだろう。サンタンゲンだ。これが守られていないとすれば、一部の方言か、子どもの犯す単純な間違いということになるが、それにぴったり当てはまる日本語はもちろんない。そこでこの部分に関して新旧二人の訳者はともに、敢えて日本語に置き換えず、そのままカタカナにしている。

「ヒー・ダズント」「シー・ダズント」と言うべきところを「ヒー・ドント」「シー・ドント」と・・・（村上）

「ヒー・ドント」「シー・ドント」と文法的な間違いを・・・（野崎）

ところで、“The Catcher in the Rye” は50年以上前に出版された本。いま現在、“he don't” / “she don't” はどうなのか。相変わらず間違いである。しかし、以前以上に英語世界の至る所にあふれていることも事実。

私自身、かつて英国滞在中に下宿先のおばちゃんの“he don't” / “she don't” を何度指摘し、直したことが。そうするとウェンディは、しばし「ああ、そうね」という顔をして、その顔のまま近所のユダヤ人のおばちゃんを “She don't give a compliment” (彼女はお世辞は言わないのよ) などと言ったりするのであった。

サンタンゲンが無視されるのは、特に否定文での He don't, She don't の形が多い。そうしたからといって通じないということはないわけで、だからなくなるのだろう。歌詞やコピーの中などでは、語呂の良さで、メロディーに合うように、あるいはその他の意図をもって、敢えて“誤って”使われることさえあるように思える。たとえば以下は、いずれもビートルズの別々の曲から引っ張り出してきたフレーズである。

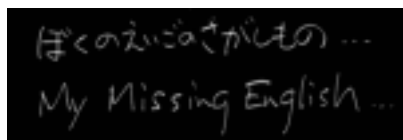
女：

My love don't give me presents.

「わたしの彼はプレゼントをくれないの」

He just do what he please.

「彼ったら自分のしたいことしかしないし」



学校英語にわすれものありませんか？

男：

But she don't care.

「でも彼女は気にしちやいないんだ」

正式な英語では、

My love doesn't give me presents.

He just does what he pleases.

But she doesn't care.

であるべきものだ。

He don't, She don't は、決してその使用をお薦めできるものではないが、ビートルズに限らずいくらでもその例は尽きない。いくつか紹介しよう。

He Don't Know What He's Doing

「彼は自分のやってることがわかってない」

(反ブッシュデモ隊のプラカード)

Love don't come easy

「恋は簡単にはやって来ないのよ」

“You can't hurry love” Diana Ross & The Supremes / Collins など

Death don't have no mercy in this land

「この地では、死は情け容赦ない」

“Death Don't Have No Mercy” Gary Davis

she don't use butter / she don't use cheese / she don't use jelly / or any of these / she uses vaseline / vaseline / vaseline

「かのじょはバターはつかわない。かのじょはチーズはつかわない。かのじょはゼリーはつかわない。そういうのはぜんぜんつかわない。かのじょはワセリンをつかうんだ、ワセリン、ワセリン」

“She Don't Use Jelly” The Flaming Lips

(望月)



All We
Need Is
Love



(六面から続く)

と、スタジアム全体は一瞬声を無くす。やられてしまったということ、を劇的に嘆いて声を無くすというのではなく、寧ろ無関心に近いサイレンスである。すぐに雑踏にもどる。彼らの中には、地元の覇頂のチームしか存在しないのだ。

このような都市の広場にいるような、一点にフォーカスがあたらない雑踏の中で、真剣勝負を繰り広げる選手達は、集中力を要求される。少しでも気が緩んだら、相手がつけ入ってくるばかりか、味方であるはずの観客までが声援を罵声に変えてしまう。本物の刀をもって大観衆の見下す競技場で、生きるか死ぬかの戦いをしたという、ローマ時代のアスリートと、その勝負をとりまく人びとの関係

が二重写しになった。ロナウドもロベカも頭を丸めて、ジダンすらもそれに近く、ひとつの聖なる戦いを行うのだ。

サンチアゴ・デ・コンポステラにはまだ行ったことが無い。そこには見てみたい建物もある。イベリア半島の端がどんなところかも見てみたい。そして少し西へ行けば、そこはポルトガルである。来年、ポルトガルで大きな祭典がある。ヨーロッパだけでなく、世界から多くの巡礼者がやってくるに違いない。だから、こうやって、片時も下調べを欠かさないのがある。今日は、奇跡的に朝早く目が覚めた。これもサンチアゴ・ベルナベウの聖なる力だろうか。

(つづく)

(一面から続く)

レンズの向こうの存在が幻想でしかないような、瞬間的な疑惑に駆られることがある。ファインダーを通さずに肉眼で確認することによって、一応は安心できたような気になる。けれども、デカルトにお出まし願わずとも、目や耳は大いに過つ可能性があるのは自明。見間違いや聞き間違いなぞ、家常の茶飯である。点の集合でしかない写真を実物と勘違いしてしまい、シンセサイザーで合成した音を楽器や声と取り違えてしまう。だったら、手で触れてみればいい。そう思う人も少なくないだろう。しかし、手だって信用はできない。女の娘が恋人の手だと思つて握り締めていたものが、実は他人だったという場面を目撃したこともある。気づいたときの女の娘の慌てぶりも見物だったが、握られていた方の照れ具合も何だか微笑ましく、心温まった二十年前のある日。

話を戻そう。感覚のどれもが、単独では信用できないというのなら、五感を総動員すれば良い。眺め、聴き、触れ、舐め(ものによるけれど)、嗅ぎ(もちろん、これもものによる)……さて、確証が得られるのかというと、先達でのテレビ番組ではそうまでしてもトリュフやキャビアの本物と偽物の区別がつかない、という実験結果を放送していた。それほど日本の技術は優れている、という話の流れであつたのだが、だから何なんだよ、と思う私がついた。

感覚など当てにならぬものなのだ。夢で見たことの方が現実よりよほどリアルであることだって、よくあること。では、人は何を当てるにはいいののか。結局のところ、自身の中の何かだ、としか言いようがない。感性なのか知性なのか、あるいは、その総合なのか。肩書きはともかくも、あなたがこれだ、と信じられる

かどうかしか、最終的には判断の基準になるものはない。数値や識者の助言を当てにしないけれど、最後の決断は自分でするしかないのだから。いやいや、そんな小難しいことではなく、私が言いたいのは、好きなものは好きだと言え自分があればいいという程度のことなのだけれど……。

現実と非現実とを見極めるのに、結局、信じられるものは自分だけ。そう思いながら、ここまでインクを紙にこすりつけてきたわけだが、ここに来て、そもそも夢と現を分かつ必要があるのだから、などと自問している始末。そうなのだ、夢幻の境など、私には不要なのである。何となれば、私は自称藝術家なのであるからして。無から有を生み出すのだからして。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki, architect

Voice : +81-3-3220-0644
 Facsimile : +81-3-3220-0640;
 e-mail: geta@geta-s.com
 篠崎健一アトリエ

編集後記
 からす新聞第五巻第九号(通巻第五七号)無事、発行できました。
 新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
 次号発行予定日は二〇〇三年十月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

ゲタス

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451